



原沢伊都夫教授退職記念



静岡大学国際連携推進機構

原沢伊都夫教授の紹介

1954年12月23日 山梨県に生まれる。明治大学文学部文学科卒業。卒業後、ブラジル、アメリカ、オーストラリアで長期滞在を経験する。オーストラリアでは、オーストラリア国立大学大学院で応用言語学を学ぶ。帰国後、MOA財団で外国人研修生の研修を担当し、1992年から富士フェニックス短期大学の講師。静岡大学には留学生センターが設置された2000年に留学生センター教授として採用される。その後、2006年に国際交流センター教授、2018年に国際連携推進機構教授となり、2020年の3月に定年を迎える。静岡大学では、留学生に対する日本語教育を中心に、日本語学、異文化コミュニケーションの研究を進めた。最近では第2言語習得論による言語教育に力を注いでいる。

主な著作に、『日本語教師のための入門言語学－演習と解説』スリーエーネットワーク、『多文化共生のための異文化コミュニケーション』明石書店、『異文化理解入門』研究社、『日本人のための日本語文法入門』講談社、『考えて、解いて、学ぶ日本語教育の文法』スリーエーネットワークなどがある。

趣味は、高校時代は落語、大学時代はマジック、大学卒業後は、テニス、スキー、スイミング、伊豆の海でのシュノーケリング、パラグライダーなど、アウトドア系の活動が好きである。



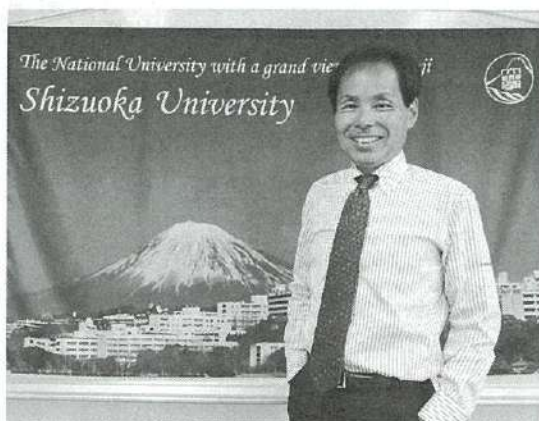
私と異文化コミュニケーション

国際連携推進機構

教授 原沢 伊都夫

私の専門の一つである異文化コミュニケーションでは異文化は外国に限られるものではなく、自分以外はすべて異文化であると考えている。つまり、私たちは生きている間、絶えず異文化に遭遇し、異文化適応を繰り返しているのである。

私の人生を振り返っても、まさに人生そのものが異文化コミュニケーションであったと言えることができるだろう。私が静岡大学で教鞭を執るようになったのは2000年に発足した留学生センターに教授として採用されてからである。その後、留学生センターは、国際交流センター、国際連携推進機構と名前を変え、留学生の数も200名前後から現在では470名を超えるまでになった。私の人生のキャリアの中で静岡大学における20年間はおそらく最も輝いていた時期ではないだろうか。しかし、静岡大学に来るまでの私の人生はまさに異文化との遭遇の繰り返しであり、それは現在も、そしてこれからも続いていくと言えるだろう。そんな私の異文化体験を振り返りながら、それがどのように現在の私に影響しているかお伝えしたいと思う。かなり個人的な体験談になるが、しばらくはご容赦願いたい。



*

*

中学まではおとなしく、人前で話などをしたことのなかった私がどういうわけか高校で落語研究部、通称「落研」に入部した。特に落語に興味があったわけではないが、友人に誘われて見に行った部活の紹介で面白いと感じ、その友人に誘われるままに入部したのだ。後で知ったのだが、私の高校（山梨県立甲府第一高等学校）の落研は県内でも有名で、学園祭ともなると多くの女子高から出演依頼が殺到した。女子高の学園祭では三流亭永楽さんりゅうていながらくという芸名で落語を披露すると同時に「笑点」などでおなじみの大喜利で会場を大いに沸かせた。NHKのローカル放送のテレビ番組に出演したこともあった。落研の活動はとても楽しく充実した学園生活であったと思う。

明治大学に入学すると、迷わず落研に入部しようと部室を訪問したのだが、高校時代の上品な雰囲気とは異なり、あまりに奇抜な部風にちょっと無理だと感じてしまった（三宅裕司や立川志の輔、コント赤信号の渡辺正行と小宮孝泰がいたと後で聞いた）。近くにあった部室を覗いてみると、そこはマジックグループ（マジックサークル）の部屋だった。笑いの絶えない明るい雰囲気の中で見せてもらった手品の不思議さに魅了され、すぐに入部することを決めた。その後は、どっぷりとマジックの世界にのめりこんでいった。相手が不思議な顔をするのが楽しく、武者修行と称して、学内の喫茶店で女子学生相手にカードマジックを見せたり、クリスマスシーズンになるとデパートのオモチャ売り場で手品の実演販売のアルバイトをしたりした。芸能人の隠し芸大会





(テレビの特別番組)に助手として出演したり、プロマジシャンと一緒にキャバレー巡りをしたこともある。大学ではマジックサークルの長である幹事長となり、50名を超える部員をまとめるという大役を担うことになった。マジックで人を喜ばせるということに生きがいを感じ、勉強はほとんどせずにマジックに明け暮れる4年間であった。

大学4年になっても就職という現実的な世界に直面できず、自分はいったい何をしたらいいのか自問する日々が続いた。そんなときに現れたのがブラジルで活躍する父の友人だった。会って話をしてみると、「何をしたいのかわからないのなら、ブラジルへ来い。私が面倒を見てやる。」と言われ、その言葉に迷うことなくブラジル行きを決めてしまった。今から思うとなんとも無謀でいい加減な決断だったが、日本全体が高度経済成長の真っただ中にあり、何をしても明るい未来が期待できるような世の中だった。そして、私もまだ未熟な22歳の青年だった。

大学を卒業して6月にブラジルに渡った。初めて見るリオデジャネイロの大地は赤かった。日本の裏側に位置し、飛行機で28時間かかり、時差は12時間、季節も正反対の国だった。もう簡単には帰れない、そんな遠い異国に来てしまったという感覚は帰国の日まで続いた。

ブラジルでは父の友人の紹介で、東洋医学研究所で働くことになった。研究所といっても、鍼灸を使った指圧の施術所のことである。一から指圧と鍼灸を教わり、ブラジル人への診療の手伝いを行った。ブラジルでは東洋人であることが重要で、プロフェッショナル・ハラサワと呼ばれていた。今から思うと大した知識もなく、ブラジル人への治療に加わったことに、罪悪感を持っている。その後、イグレージャ・メシアニカという教会で働いたりしながら、ブラジルで2年間を過ごした。

ブラジルは私にとって初めての外国だった。ほぼ単一民族国家である日本とは違い、人種のるつぼと言われ、町には白人、黒人、混血の人種があふれていた。狭い日本社会で育ってきた私にとってブラジル社会は何もかも新鮮で驚かされるが多かった。男性とは肩をたたきあい、抱き合い、女性とはキスを頬に2～3回するのが日常的な挨拶だった。恋人同士であれば私たちの前でも平気で唇を重ね、体を触れ合って戯れている。友達が集まれば、下ネタや人種のジョーク(ピアダ)を披露して大笑いしている。そんな情熱的で話し好きで楽天的でちょっといい加減だが底抜けに明るいブラジル人との生活はとても楽しいものだった。私もそんなブラジル人から人生を楽しむコツを学んだように思う。

ブラジルで多くの外国人と接する中で英語の重要性を感じるようになった私は、ブラジルから帰国すると、アルバイトで資金を貯めながら、アメリカへの語学留学を目指すことにした。日本人が少ないところに留学しようと思い、アメリカ南東部にあるサウス・キャロライナ大学に付属する英語学校に入学を申し込んだ。しかし、実際に現地に行ってみると、日本人学生がかなりいるのには驚いた。その頃の日本人は世界中にあふれていたのだ。

英語を学びながら、大学のポルトガル語の授業に紛れ込んだりして、アメリカ人学生との交流を深めることができた。また、ホームステイを通じてアメリカ人の生の生活を体験することができた。その頃にはすでにアメリカの家庭は崩壊しており、離婚、再婚などによって複雑な家庭環境になっている現実を目の当たりにした。白人と黒人の目に見えない壁にも気づくようになり、アメリカの陰の部分を感じとることができるようになった。





ブラジルとアメリカでの体験から少しずつだが自分が目指すものが見えてきた。海外と交流する仕事がしたいと感じるようになったのだ。初めに思ったのは旅行関係で働くことだった。そして、半年間猛勉強し、海外旅行を扱うために必要な一般旅行業務取扱主任者の資格を取ることができた。資格を取るには取ったが、まだ何か物足りない自分がそこにはいた。そんな時に、海外の大学で学べる奨学金のチャンスが巡ってきた。

私が働きはじめたMOA財団で留学の公募が出ているのを知ったのだ。オーストラリアの日本語教育に興味を持ち始めていた私はオーストラリアのことを必死に調べ、日豪関係の重要性を記述した報告書をまとめあげると、直属の上司に提出した。自分の熱意を伝えたかったのだ。そして、海外で学ぶための奨学金制度に申し込んだ。この熱意が通じたのか、運よく社内審査をパスし、晴れてオーストラリアに留学することになった。

シドニーにしばらく滞在した後、キャンベラにあるオーストラリア国立大学に入学することが決まった。最初は応用言語学のコースだった。その後、日本語応用言語学の修士課程に入学すると、私の興味は日本語の文法研究に移っていった。言語学の講座で言語の構造の分析に興味を持った私は日本語の文法の面白さにもひかれるようになっていたのだ。

恐らくオーストラリア時代は私にとって人生で一番勉強した時期ではないだろうか。学業に何の関心を持たなかった日本の大学時代とは異なり、言語学という学問に純粋に興味を持つようになり、寝食を忘れて勉強した。また、そうでなければ外国において学位取得は不可能だっただろう。英語というハンディキャップがある以上、現地の学生の3倍は勉強しなければならないという切迫感が常に頭から離れることはなかった。こうして、言語の研究に没頭するようになり、言葉の背後に潜む理論を見つける面白さが見えてくるようになった。

ちょうどその頃、大阪女子大学（当時）の仁田義雄先生が特別講義に来てくださっていた。大変お忙しい先生だったが、昼食時に面談のチャンスが回ってきた。これ幸いと、パンをほおぼる先生に、今後の研究について相談したところ、「～てある」の研究を提案された。それが、私の「～てある」研究の始まりだった。その後、「～ている」と「～てある」の論文をまとめ、修士号を取得することができた。論文はもちろん英語である。この修士論文をもとに書き上げた「A Pragmatic View of V-te-i-ru and V-te-ar-u（テイルとテアルの語用論的分析）」は世界的な雑誌である「Journal of Pragmatics（語用論）」にも掲載された。仁田先生の助言がなければ、私の研究課題は「～てある」になっていなかっただろう。

ブラジル、アメリカ、オーストラリアでの海外生活では大学時代に打ち込んだマジックの恩恵を大いに受けた。ブラジルではクリスマス・パーティにマジシャンとして何度も呼ばれ、皆にとっても喜ばれた。アメリカではマジックの高級会員制クラブのマジックキャッスルに招待してもらい、世界的に有名なマジシャンに会うことができた。オーストラリアでは大学のタレントナイト（余興大会）に出演し、見事優勝して、その賞金で日本人の友人たちに日本食をふるまうことができた。「好き」ということだけでやってきたマジックだったが、海外でこれほど役に立つとは大学時代には想像すらできなかった。

長い海外生活を終え、日本に帰国したのは32歳の時だった。その後、結婚した妻が子どもを産んでから病死するという不幸があったが、再婚して男の子3人に恵まれた。MOA財団ではブラジ





ルを中心に世界中から集まった研修生の研修を担当した。日本語の授業だけでなく、ビザの取得や生活全般にかかわる業務をこなした。研修生を連れて富士山に登ったり、スキーに連れて行ったり、京都・奈良の観光に行ったり、カラオケパーティを開いたり、ソフトボールやスイミングを一緒にしたりと、忙しいながらも充実した日々を過ごした。海外留学を入れて11年間MOA財団で働いたあと、御殿場に新しく新設された富士フェニックス短期大学に教員として採用され、移ることになった。

私の人生にとって、正式な教員人生の始まりだった。37歳の時だった。富士フェニックス短期大学には初めて教員に採用された若い研究者が多く集まり、新設校ということもあって、希望と熱気にあふれていた。小さな大学であったので、教職員のつながりが深く、教員同士の研究会や懇親会などが活発に行われた。特に教員と学生との垣根が低く、サークル活動を通して学生と一緒にいる時間が長かったように思う。私にも時間的な余裕が生まれ、教育・研究に従事しながらも、今までやりたいと思っていたスポーツ活動（テニス、スキー、スイミング、マリンスポーツ、パラグライダーなど）を楽しむゆとりができた時期でもあった。

富士フェニックス短期大学時代は個人的には充実した日々ではあったが、研究活動という点では、必ずしも満足のいくものではなかった。それは、私の担当した科目が英語科目であり、専門の日本語教育は非常勤の大学でしか教えていなかったからである。また、小子高齢化の時代を迎え、地方の無名の短期大学は経営が難しくなってきたこともあり、他大学への転職を考えるようになっていた。ちょうどその頃、静岡大学に留学生センターが設置され、それに伴い教員公募が出ているのを知った。地元の大学でもあり、採用のチャンスがあるかもしれないと思い、迷わず公募に応募したのだ。

*

*

この原稿の冒頭で、私の人生のキャリア・ハイは静岡大学の時代ではないかと書いたが、もし静岡大学に来ていなかったら、私の専門である日本語学や日本語教育、異文化理解教育の研究を深めることはできなかつただろう。地域の小さな短大で英語を教えながら、教員人生を終えていたに違いない。その意味で、静岡大学への転出は私のキャリアにとってターニング・ポイントとなる出来事であった。

中曽根内閣の時代に留学生10万人計画が発表され、文部科学省が国立大学の留学生受け入れ環境を整備する中、次々と留学生センターが各国立大学に設置されていった。そのような流れの中で新設された留学生センターでの教育研究活動の多様さは地方の小さな短期大学の比ではなかった。全国の国立大学の教員との接点が数多く生まれ、全国的な研究会や協議会などに参加する機会がぐんと増えた。静岡県内でも国立大学の使命としての役割が求められ、地域の日本語教育や国際教育への貢献が増えていった。

私の研究も短大時代と比べ、飛躍的に広がっていった。日本語教育の分野では、地域の日本語教員養成にかかわったことから、初学者のための文法に関するテキストや新書を出版することができた。特に『考えて、解いて、学ぶ 日本語教育の文法』（2010年スリーエーネットワーク刊）は好評で毎年版を重ね、11刷りを数えている。多くの大学や民間の日本語教師養成機関でテキストとして採用され、日本語教師を目指す人のための文法書の定番とまで言われるようになった。





また、異文化コミュニケーションの分野に興味を深まり、学会の研修会に積極的に参加し、知識を深めていった。そこで私のこれまでの海外での経験を理論づけることができたのは大きな収穫であった。そのような成果をもとに出版した、理論と実践をつなぐテキスト『異文化理解入門』（2013年研究社刊）は、日本図書館協会の選定図書に指定され、日本中の図書館に配本されるという名誉にあずかった。このテキストは、日本語教育関係者のみならず、異文化関連科目を担当する多くの大学教員にも教科書として採用されている。ある大学では新入生全員に購入させているということを出版社の担当者から聞いた。

書籍を出版するようになってから、県内だけでなく全国各地で研修会の講師として呼ばれることが多くなった。北は北海道から南は九州まで様々な場所で文法や日本語学の話をするのは楽しいことだった。特に異文化理解のワークショップは発行元の研究社において定期的に開催されるようになり、今年で第8回目を迎える。この研修会には日本各地から国際教育関係者が集まり、異文化コミュニケーションの具体的な教育方法の紹介を行っている。社会における異文化理解教育のニーズの高さを物語っている。

静岡大学では公開講座とシンポジウムの企画・運営を担当し、毎年のように公開講座やシンポジウムを静岡または浜松で開催し、地域への貢献を深めることができた。公開講座では日本語教育の専任教員が講座を担当し、日本語教育に関連する基礎的な知識を伝え、受講者には修了証を発行した。シンポジウムでは日本語教育に関連するホットなテーマを選び、参加者との熱い議論を提供した。個人的にも、その分野の専門家と情報を交換できたのは貴重な体験だった。シンポジウムの成果は毎回報告書としてまとめ、関係機関や関係者に広く配布することができた。

海外の研究交流活動も参加の機会が大きく増えた領域だった。私の研究分野ではカナダやオーストラリア、ヨーロッパにおける学会に毎年参加するようになり、日本語教育の成果を現地で発表する機会を数多く持つことができた。世界の日本語教育事情を肌で感じるとともに、世界中から来ている留学生の母国で日本語教育に従事する研究者と交流できたことは非常に有意義なことだった。

大学の交流分野では、2回にわたり国際交流基金のカケハシ・プロジェクトの助成を獲得し、学生を引率して、アメリカの市民や学生との草の根交流に参加することができた。また、留学生獲得のために、海外における「日本留学フェア」にもたびたび参加した。覚えているだけでも、韓国、中国、タイ、ベトナム、インドネシア、インド、ウクライナの国々を訪問し、現地の学生に直接静岡大学を紹介するイベントに参画した。

静岡大学では、着任以来、静岡大学にとって一番交流の歴史の長い海外協定校であるネブラスカ大学オマハ校（UNO）の連絡教員をつとめた。UNOは他の海外協定校と比べて学生や教職員の交流活動が活発で、毎年のように訪問者があり、その対応に奔走した。2006年には国際交流センターの初代センター長である村井久雄先生とともにUNOを訪問することができた。また、2018年には懸案であった静岡大学学長のUNO訪問が実現し、石井潔学長に同行し、UNO関係者との交流を深めた。さらに、大学間交流協定40周年の節目に当たる2019年にはUNO学長一行を迎え、40周年記念式典を盛大に開催することができたのは私の最後の大きな仕事になった。

静岡大学に採用されてからは、初代留学生センター長である本多隆成先生をはじめ、杉山融先





生、露無慎二先生、村井久雄先生、鈴木滋彦先生、白井靖人先生にお世話になった。私にとって最初の上司である本多先生には、国立大学の教育活動のイロハについていろいろと教えていただいた。本多先生に同行して、シンガポールとインドネシアの大学を訪問したのはなつかしい思い出になっている。また、鈴木滋彦先生には私の研究活動を高く評価していただきとても心強かった。大学の公務とは直接関係のない本の執筆や他大学等での教育活動をあまりよく思わない人も多い。しかし、私の研究を支えてきたのはこうした学外の活動によるものが大きかった。そして、それが大学教員の大きな使命である社会貢献につながっていると私は信じている。鈴木先生にはそれを後押ししていただいたと感じている。

大学の同僚にも恵まれた。中里弘子さん、熊井浩子さん、案野香子さん、袴田麻里さんの4人には、留学生センター時代からともに静岡大学の留学生教育を支えてきた仲間として、また、松田紀子さんとライオン優子さんには学生交流を含む学術交流を進展させてくれた仲間として、感謝の気持ちを伝えたい。

* * *

最後に、同窓会などで大学時代の友人に会って私の名刺を差し出すと、腰を抜かささんばかりに驚かれる。それくらい大学時代の私のイメージとはかけ離れた職業に就いていると思われるのだ。大学時代はマジックに明け暮れる毎日であまりと言っていいほど勉強しなかったし、大学を出てからは海外を放浪しどこにいるのかわからないという風評が仲間内に流れていたほどだ。しかし、ブラジル、アメリカ、オーストラリアで生活したことは決して無駄ではなかった。私に少しでも大学教員としての資質があるとしたら、それは、研究活動とは無縁の様々な異文化体験に負っている。このような人生の異文化コミュニケーションにおいて培われた無形の財産が現在の私を支えていると言っていいだろう。その意味で、これまでの人生の中で無駄であったものは一つもなく、これからも私の異文化コミュニケーションは続いていくだろう。今後も新しい異文化との出会いに期待しつつ、第二の人生とも言える定年後の自由な生活を楽しんでいきたい。





「考えて、解いて、学ぶ」先生の授業

静岡産業大学

准教授 土居 繭子

原沢先生、この度はご退職おめでとうございます。

思えば、先生に初めてお会いしたのは、日本語教師養成講座の教室でのことでした。日本語教員を目指す私たち受講生に、文法などの授業をしてくださいました。「同じ『を』でもいくつかの種類に分かれます。どんな種類があるのか考えて、グループ分けをしてみましょう」。

「を」を使ったたくさんの例文の紙を見比べて、クラスメイトたちとああでもないこうでもないとグループ分けしたのが、つい先日のことのようです。

クラスメイトたちは、昼間は学校に行ったり仕事をしたりした後に夜間3時間授業を受けていたので、かなりハードな日々でした。そんな中で、先生の授業はただ聞いているだけではなく、常に「考えてみましょう」と呼びかけてくださるので、たくさんの発見があり、とても楽しく印象的でした。

先生の授業を受講し終わった後も、私はわからないことがあれば、先生の授業の合間を狙って先生に質問をしに行きました。今から思えば、長時間の授業の合間の10分という貴重な休み時間だったにもかかわらず、嫌な顔もせず真剣に質問に答えてくださって、本当にありがたいことでした。

養成講座を修了してからも、日本語のことでわからないことがあると、勤務先となった台湾や中国からメールで先生に質問を投げかけていました。いつまでたっても、変わらず先生は頼もしい先生です。

先生は、講座が修了してからも受講生のことを気にかけてくださっていて、私にも「台湾での経験を後輩に話してみませんか」、「静大でこんなイベントをやるので、参加してみませんか」など、いろいろな機会をくださいました。

静岡大学で非常勤講師として授業を受け持つことになったとき、まさか先生と同じ職場で働ける日が来るとはと、感慨深かったのを覚えています。

いつの間にか、日本語教員として働き始めて十数年経ちました。その間、ずっと先生から教わった日本語教員としての基礎知識を頼りに、毎日毎日勉強しながら教えてきました。先生に教えていただいていた受講生の頃と、気分的にはほとんど変わっておらず、まだまだ自信のない私です。でも、困ったときには、「考えてみましょう。」という先生の言葉を思い出して、自分でも学びながら授業に取り組んでいます。

このように、今、私が日本語教員として人生を送ることができているのは原沢先生がいてくださったことで、感謝の言葉は尽くせません。これからも、先生のように、いつも学生一人一人に丁寧に向き合い、いろいろなことに興味をもって楽しそうに取り組む教員になれることを目標に、精進したいと思います。

先生、本当にありがとうございました。そして、これからもよろしく願いいたします。





恩師である原沢先生

日本大学国際関係学部
助教 松浦 康世

私が原沢先生と出会ったのは東日本大震災の年でした。プライベートのことで落ち込んでいた私にとって震災は更に衝撃的な出来事でした。映像を見るのはとても辛いことでしたが、そんな中でも被災地の方々が復興に向けて気持ちを切り替えようとしている姿を見て、私は本当に励まされた思いがしました。そして、それまで中途半端に終わっていた日本語教師の仕事を本格的に始めようと決意したのです。それで静岡大学に問い合わせたというのが原沢先生との出会いのきっかけでした。

今考えると本当に無謀なことをしたと思います。非常勤講師への応募方法も知らず、求人募集を調べることもなく飛び込んでしまったのです。門前払いをされてもおかしくない行為でしたが、幸運にも対応してくださったのが原沢先生で、今は空きがないと丁寧にお返事くださった上で、求人情報の見つけ方や履歴書の書き方までアドバイスをくださいました。そのお陰ですぐに早稲田大学の求人を見つけ、日本語教員として第一歩を踏み出すことができました。

その後二年ほど経った頃、原沢先生から三島の日本大学で専任教員の求人が出ているとご連絡をいただきました。実家のある静岡県内で働けるのは魅力的な話でしたが、専任教員など私にはとても資格がないと思いました。しかし原沢先生が「長所を上手にアピールすればチャンスはある」とおっしゃったので受けてみると不思議にも採用となり、現在まで楽しく仕事をさせていただいています。チャンスをくださった原沢先生には今でも感謝の気持ちで一杯です。

原沢先生は三島の日本大学で週一回講義を担当してくださっています。日本語教員養成のための日本語文法の授業では、学生たちが原沢先生を慕っている様子がよく伝わってきます。たまたま「原沢先生、大好き」という声が聞こえたので、その学生たちに「どうして？」と聞いてみると、「丁寧に教えてくださるし、いろいろな体験談も聞けるから視野が広がった」と話していました。

学生たちだけでなく私自身も先生から学んできました。日本語学の授業では先生が書かれた教科書『考えて、解いて、学ぶ日本語教育の文法』と『入門言語学』を使用しました。どちらも30コマの授業に丁度良く、基礎から応用まで順を追って書かれており、単に理論だけが並べられているのではなく各単元に必ず練習問題がついています。学生たちからも「ポイントが整理されていてわかりやすい」と好評でした。細部にまで気を配った内容を見ていると、先生の学者肌的な几帳面さがよくわかります。教科書に沿って教えていけば間違いないと、安心して授業をすることができました。

本当に原沢先生は私にとって救世主のような存在でした。これからも三島でお世話になりますが、ここで一旦お礼を言わせていただきます。どうもありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いたします。



原沢先生との出会い・異文化理解との出会い

(株)研究社編集部

濱倉 直子

原沢伊都夫先生とはじめて出会ったのは2012年の9月。対面ではなく、数枚の紙—それはのちに担当することになる『異文化理解入門』の企画書。これが私の編集者人生を変えたと言っても過言ではありません。

その当時は英和辞典の担当でしたが、原沢先生の企画書が回ってきたとき即座に「これ、担当したいです！」と当時の編集部長に直談判しに行きました。それまで自分の意見を主張することなど殆どなかったのですが、これはどうしても担当したいと思わせる魅力にあふれていたのです。「読書や勉強がきらいな私でも読みたい内容だ！」と。企画書は、本当に出来上がりがしっかりイメージできるすばらしい構成でした。ここまでしっかりと練られた、そして「これ、担当したいです！」と言いたくなる企画書は、残念ながらそれ以降まだ出会っていません。

そんな魅力的な企画書を書かれた原沢先生に対面ではじめてお会いすることになったのが、同じ年の12月。直談判した編集部長に連れられて三島まで伺いました。それまで恩師以外の大学の先生にお会いする機会が少なく緊張していたのですが、お会いした瞬間、楽しい企画書と同じ雰囲気のととても気さくな先生だなと安心しました。先生のお住まいが、私がかつて高校時代を過ごした静岡だったこともあって、すぐに打ち解けられたのかもかもしれません。

『異文化理解入門』の編集作業では、辞書編集では経験できない色々を経験しました。四コマ漫画のために漫画家さんとやり取りをしたり、イラストを依頼するために一日中絵を描いたり。そのすべてが当時の私にとってはとてもワクワクする異文化でした。またどんなに遅い時間でも質問のメールにすぐ返信を下さったのもとてもうれしく、勇気づけられました。

そんな『異文化理解入門』の編集作業で何度も何度もゲラを読み込んでいるうちに、すっかり「異文化」への興味が増大してしまい、最近は英和辞典ではなく「異文化」関連の書籍の担当へとシフトしています。同書を読んでいただくと共感されると思うのですが、自分と向き合い、他者を理解しようとすることで、生きることが楽になったり、明るく積極的になれるのではないかと。おかげで私もすっかり行動的になりました。原沢先生のおかげです。

因みに、『異文化理解入門』は2013年6月末に刊行され、おかげさまでいろんな大学等で採用していただき、毎年増刷されています。そして刊行から4年後の2017年6月からは年2回ペースで、使って下さる先生向けのワークショップを開催し、その度に原沢先生が毎年参加されているヨーロッパの学会や教え子の方のお話などを伺って、知的な刺激を頂いています。

また『異文化理解入門』のようなワクワクする書籍を原沢先生と送り出せたらいいなと思います。関わりの深い編集者ということで、このような文章を書かせていただく機会をいただけること、とても光栄に存じます。



先生は私の駆け込み寺

外国人支援団体CIRCULO

代表 田中 夏

原沢先生との出会いは、もう13、4年前になるだろうか。当時、英語を教えることに限界を感じていた私は、地元沼津で開講するということもあり、日本語教師養成講座の門をくぐった。1期生、しかも申し込みも第I号。母語である日本語で役に立てる日本語教師という職業に魅力を感じていた。でも学校で習った国語の文法はちょっと苦手だなあ、と不安も感じながら。いよいよ授業初日。さぞ堅苦しい真面目な授業なんだろうなあ、と緊張して臨んだが、それは私の予想を全く覆すものだった。

にこやかに教室に入って来られた先生は、「先ず机を並べ替えましょう、向き合って座れるように。私の授業はみんなで話し合いながら進めていきます。」とおっしゃった。そんな最初から和気藹々とリラックスした雰囲気の中、先ず渡されたプリントには、日本語の平易な文が並んでいる。「教室に日本語を勉強します。」「先生はパーティーに来たいですか。」確か、このような文が。「それぞれの文はどこがおかしいですね。どう直しますか。」そう質問された。「みなさんは日本語を母語としているので、これらの文が間違っていることには気づくでしょう。それが大切なのです。答えはわかっている。それが強みです。後は、どうしてそれが間違っているのか、それを探っていくことが大切なのです。」

なるほど！そうか、どうして間違いなのか、どう意味が違うのかなどを見つけていけばいいのか。謎解きみたいで面白そう。こうして私の勉強はスタートした。

それからというもの、語句のニュアンスの違いや表現の違いなど、日本語を常に意識するようになり、それが今の私に繋がっている。講座修了後は、白羽の矢を立てていただき、文法の講師として教壇に立つことになった際にも、もう一度先生の文法の講義を最初から受講させて頂くという、とても有り難い機会を頂いた。

しかも「私の講義の中で、役に立つことは、授業で何でも使って構いませんよ」という本当に優しいお言葉。私のこれまでの人生で、一番勉強した時期と言っても過言ではないだろう。

教壇に立った私が、グループで話し合い、みんなで考えながら授業を進めていくという先生のスタイルを取り入れたのは言うまでもない。

また、社会人の生徒さんから様々な質問を受け、答に窮した時に、先生に助けを求めメールさせて頂くと、お忙しいのにいつも丁寧に答えてくださった。いつのまにかそんなSOSメールをしなくなっていることに今気づいた。(先生、また質問させて頂いてもよろしいですか。)

その後、先生の著書が出版されるたび、先生は本を送ってくださった。まるで、初心忘れるべからず、と諭して頂いているような気持ちになった。

最後になりましたが、先生、長い間お疲れ様でした。でも、これからも私の駆け込み寺でいてください。これからもますますのご活躍を期待しています。





プロセスを大切に！

学校法人 静岡理科大学
沼津日本語学院
教務課長 松葉 優子

大学院時代、初めての授業の前に先輩から「原沢先生の授業は目から鱗だよ」と言われました。「目から鱗」って「どういうことなのか」「これから何が起ころのだろう」と当日までワクワクしたことを覚えています。期待と多少の不安でいっぱい第一回目の授業は、先生のお優しい口調で始まりました。「何だか楽しそう」と思った矢先、課題の数々。そして、回を重ねていくごとに、脳が疲れ切る感覚。「考えて、考えて、考えて・・・」今思うにあの時のあのトレーニングが全ての基本だったと思います。「目から鱗」の意味もすぐに分かりました。私がそれまでに受けた教育は「覚える」ことを中心にしたものでした。「なぜ？」という疑問を何も持たずにいました。ところが先生の授業では「なぜ？」を引き出し、その答えを徹底的に追及していきました。答えが見えてきた時は嬉しく、授業後も仲間とずっとその議論をしたものです。現場での疑問が先生の講義を通してひも解かれ、謎が解けていきました。「そういうことか！」の連続だったのを今でも鮮明に覚えています。先生の著書である『考えて、解いて、学ぶ 日本語教育の文法』に書かれている「文法暗記ではないプロセスの学び」「自分で考えて答えを出すプロセス」こそ、先生が私たちに伝えて下さった大切なこと、つまり「自らが学ぶ」そして「力をつける」ことだと思えます。それを体得できたことに感謝の気持ちでいっぱいです。私自身日本語教師養成講座を担当していますが、この「自分で考えて答えを出す」ことを大切に、受講生の方々にもわかって頂けるように努めております。

また、授業の中では先生のお人柄に触れることも多く、学生である私達も同じ日本語を教える仲間としてみて下さり「親しみ」を感じました。研究室にも気軽にお邪魔させて頂き、どんな質問にも丁寧に指導頂きレポートのヒントになりました。その際も、共に考えて下さり、答えを導き出すようにご指導頂きました。どんなときにも考えていくプロセスを大切に、私たちに考える時間や考える機会を与えて下さいました。今でもメールで質問をさせて頂くことがあるのですが、本当に丁寧に導き、教えて下さいます。いつまでもお慕いできる先生です。

現在も日本語教師になる方々へのご指導を続けられ、教師に必要な知識を身に付けるための書籍も数多く作って下さいました。日本語教師を目指す方々や知識を深めようとされる方々にとっては大変有難い書籍の数々です。先生が常に受講生や学生と寄り添い、対話を楽しんでおられる姿は今も昔も変わらず、多くの方々から慕われる先生でいらっしゃいます。これからも日本語教師に携わる後輩たちのためにご指導頂きたく存じます。





思い出は感謝とともに

ふじのくに多文化共生ネット
代表 高澤 啓子

平成17年の冬のある日、沼津国際交流協会の日本語教室「日本語を語る会」(現「沼津にほんご教室」)の会場に、キラキラしたきれいな目の男性が入って来られました。これが原沢先生との初めての出会いでした。

「ボランティアご希望ですか？」と尋ねた私に「いえ、こんどこちらの日本語ボランティア勉強会で講師をさせていただきたく原沢と申します。準備を始める前に、どんな日本語教室か見ておきたいと思って…」というお返事。平成7年度から毎年日本語ボランティアの勉強会は開催していましたが、事前に下見にお見えになった講師は初めてでしたので新鮮な驚きを覚えました。原沢先生は熱心に私の説明に耳を傾けてくださり、最後に「誰が考えたんですか？この方法？」とお聞きになりました。「私が考案したものです。必要に迫られてやっているうちにこのような形に…」と答えましたら、キラキラした目をさらに輝かせて「ボランティアの教室で、こんなにシステマティックに準備されていて柔軟性がある教室は初めて見ました！論文にして発表すべきですよ！」と仰いました。あのときの原沢先生の生き生きとしたお声は今でも私の耳の奥に残っております。

さて、その年の原沢先生の異文化コミュニケーション講座はとても楽しく、興味深く、新鮮なアイデアが満載で、日本語ボランティアにも沼津国際交流協会の役員にも大変な人気で、その後毎年リクエストが続き、原沢先生もスケジュールさえ合えば快く引き受けてくださり、平成17年度から平成27年度までの10年間に7回も講師をしていただきました。同じ先生の講座が7回も続いたことは原沢先生の講座以外にはありません。そして原沢先生の異文化コミュニケーション講座や異文化理解講座は、沼津国際交流協会の日本ボランティアにも教室の運営にも私の活動にも素晴らしい影響を与えてくださいました。

また、平成20年には「静岡大学国際交流センター第1回公開シンポジウム」に於いて、私が考案した教室運営方法を「学習者主体オールレベル対応型日本語教室・沼津方式」として発表するという大変光栄な機会も持たせていただきました。私の日本語ボランティア人生のキラキラした部分は、原沢先生なしには語れません。

平成25年に「ふじのくに多文化共生ネット」を立ち上げた際にも、理事をお願いする方の候補に一番に挙がったのが原沢先生であったことは言うまでもありません。

原沢先生には「ふじのくに多文化共生ネット」の理事のみならず、文化庁委託の「生活者としての外国人のための日本語教育事業—地域日本語教育実践プログラム—」の運営委員として、事業のコーディネーターとして、そして講座の講師として多大なお力を貸していただき、事業を成功裏におさめることが出来ました。「ふじのくに多文化共生ネット」でも大変お世話になり、心より感謝申し上げます。

キラキラした目がまだご健在の原沢先生、静岡大学を退職されてもこの世界からは引退されないと信じております。これからは第二ラウンドですね。新たなチャレンジと益々のご活躍を楽しみにしております。

ご退職、ご勇退、新しい人生の門出、おめでとうございます。





富士山とテニスと異文化理解と日本語教育

一般社団法人
グローバル人財サポート浜松
代表理事 堀 永乃

原沢先生に向けたメッセージを、とご依頼いただき、先生といえば・・・と考えたら自然と現れた言葉が、このタイトル。いつも颯爽と登場し、たいいてい富士山かテニスで日焼けされていて、ご家族思いで優しいパパ。地域では、異文化理解のためのバーナガを、ボランティア養成講座を受講されている市民の皆さんと笑顔でなさる。冗談交じりの軽快なトークで、受講者の心を射止めている。日本語教育では、まるでブラジル滞在記のような例文で（カイピリーニャを知らない人からしたら例文自体が謎解きのよう）文法解説をされる。

私と先生の出会いは、前職時代、私が2001年から担当した日本語ボランティア養成講座である。カリキュラムの中に異文化理解を入れたいこと、そして、当時も日本語ボランティアの活動に関心のある人は女性の方が多いので、女性講師ばかりでなく男性講師も加えたいと思った。先生に講師依頼をするのは必然であったと、今でも思う。

しかも、先生は静岡大学だけに留まらず、日本大学や静岡文化芸術大学、ヒューマンアカデミーなどの民間の日本語教師養成機関でも教鞭を執っている。そう、気がつけば、静岡県内で日本語教師あるいは日本語ボランティアに携わっている（携わった）ほとんどの人が原沢ゼミ生なのではないだろうか。おそらく、ほぼ全員が教え子。つまり、原沢先生は静岡県の日本語教育を牽引し、多くの人たちの恩師であると言える。この実績は、実に素晴らしい。

そして、またおそらく先生は、この歩みを止めることはないだろう。自分のペースで、自分らしく、自分が楽しいと思うことに注力して、まるで趣味のように日本語教師を育成し続けるだろう。仕組みづくりをしている私にとって、原沢メソッドで磨かれた、魅力的な後輩・後進が続いてくれることを期待してやまない。

ところで、大学を退職されるということは、いわゆる組織の足かせがなくなることになる。原沢先生のことだから、これからは世界をフィールドに羽ばたいていくことだろう。もしかしたら、ますます忙しくなるかもしれない。

でも、心配はない。先生は、ちゃんと富士山の麓にしっかり足をつけ、自然のままにご活躍されるに違いない。今度、講師室でお会いする時には、どんなお土産話を聞かせてくれるだろうか。きっと、少年のようなはにかんだ笑顔で、とある都市の町並みや面白い人の話を手品のように繰り広げてくれるだろう。そんな話をしながら、「では、また来週」とエレベーターを降りて、また颯爽と教室に向かう後ろ姿を、私はこれまでも追い続けていきたいと思う。





「静大の顔」 原沢さん

ネブラスカ州立大学オマハ校
日本語インストラクター
武ラコタ玲子

原沢さん、この度は定年退職おめでとうございます。原沢さんはネブラスカ州立大学オマハ校(UNO)にとって、「静大の顔」でした。分からないことがあると、すぐに何をすべきかの確に助言して下さるので、とても心強くありがたい存在でした。

原沢さんのいらっしゃらない静大は想像し難いですが、引き継いで下さる職員の方々と一緒に、原沢さんがこれまで築き上げられた両校の友好関係を、更に育てていきたいと思っております。

また、日本語の教官として、これまでたくさんのUNOの学生がお世話になりました。中にはかなりのご心痛を与えたに違いない学生もおりました。でも、いつも忍耐強く、誠意あるご指導をして頂いたことを、心より感謝しております。

更に、私たち家族が静岡を訪れた際は、家族ぐるみでお付き合いをして下さいました。今年16歳になる娘は、幼い時、原沢さんの息子さんと一緒に熱海で走り回ったり、ご自宅で鉄板焼きを食べたり、花火を振り回した(?) ことを、今でもはっきり覚えているそうです。長い間、公私共に大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

これから原沢さんにとって、第二の人生がスタートします。ご退職後も、ご講義や執筆活動を続けられるとのことですので、まだまだお忙しくご活躍されそうです。でも、お時間ができましたら、今度こそ、毎年静岡サマーツアーの参加者の皆さんが目にする、アメリカの雄大な自然を見に、アメリカにいらして下さい。お待ちしております。



原沢伊都夫先生へ感謝の気持ちを込めて

国際連携推進機構 日本語担当

熊井浩子、案野香子、袴田麻里

1 原沢さん、お世話になりました！

原沢さんの素晴らしい点はオールマイティーで、どんな仕事も難なくこなしてくださるところだと思います。特に通常の仕事に加え、ネブラスカ大学オマハ校との連絡員のお仕事は非常に大変だったと思いますが、おかげで協定締結40周年記念のイベントも無事終わることができました。また、いつもバランスの取れた的確な判断をしてくださるので、部門長としてまずご相談するのが原沢さんでした。いろいろなことをスマートにシステムティックにまとめ、整理してくださる力も印象的です。おかげでごちゃごちゃしていた書類や手順などがとてもスッキリしたと思います。専門についても、文法から異文化理解にも領域を広げられ、授業はもちろん精力的に講演や執筆活動に励まれていたことも頭が下がる思いでした。その上、いつも明るく爽やかに毎日を楽しんでいらっしゃる場所にも学ぶべき点が多かったと思います。まだまだお若く、退職なんて信じられない気持ちですが、これからもご健康に留意して、ご活躍いただきたいと思います。約20年の間、本当にお世話になりました。

(熊井浩子)

2 原沢先生から学んだこと

原沢先生とは静岡大学が留学生センターを立ち上げた2000年に同期採用されましてから今に至るまでご一緒です。この間、せっかちで雑な性格の私は見習うところばかりでした。『日本語文法』掲載のご論文、そして多くのご著書からは詳細なデータの収集と分析方法を学びました。学生へのご指導からは、明るく快活でありながら、わかりやすくきちんと説明することの誠実さを学びました。定年退職なさるまで、そのお姿が一貫していたことは素晴らしく思います。原沢先生から初めていただいたオーストラリア出張のお土産の「コアラ」は、我が研究室の癒し系マスコットです。ずっと大切にします。長い間本当にありがとうございました。これからも後進への変わらぬご指導ご鞭撻よろしく願いいたします。

(案野香子)





3 原沢先生の企画力と行動力

原沢先生には何かを新しく企画して実行する方法を間近で見せていただきました。公開講座やシンポジウムは、原沢先生の働きなしには実現しなかったものです。「話っ、輪っ、和っ！」も立ち上げ期の第1回、第2回とも、原沢先生の人脈に助けられました。私がおっともお世話になったのは、留学生のスキー研修です。毎年、静岡からは原沢先生、浜松からは袴田が引率し、3日間の日程を進めてきました。怪我人が出たり、病人が出たり、忘れ物でトラブルがあったりと、毎回いろいろなことがありましたが、原沢先生の企画力のおかげで、スキー研修が静大最大の思い出と言う卒業生は決して少なくありません。原沢先生が始めてくださった企画を国際連携推進機構が継続できるよう努力したいと思います。ありがとうございました。（袴田麻里）



左から 案野、熊井、袴田、原沢先生



「日本の生活」校外学習にて留学生と



留学生スキー旅行にて



これまでにお世話になった皆さん、本当にありがとうございました！

2020年3月吉日 原沢伊都夫



